平成 26 年 6 月 2 日

日本真珠輸出組合
理事長　清水勝央　殿

一般社団法人 日本建築学会
近畿支部支部長　小坂郁夫

日本真珠会館の保存活用に関する要望書

拝啓　時下ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。さて、貴組合におかれましては、神戸市中央区東町に位置いたします日本真珠会館の建物を建て替える予定である由、新聞等の報道により聞き及んでおります。

当該建物は、1952（昭和 27）年、真珠産業振興を目的として兵庫県下の真珠関連企業の寄付等により建設されたもので、戦後兵庫県下に良質な建物を数多く残した兵庫県営繕課技師、光安義光を中心とした兵庫県営繕課の設計によるものです。

その建築の有する価値は別紙「見解」に記されたとおり、近代日本における歴史的建築として、また景観上も大変優れて価値の高いかけがえなきものであります。また国の登録有形文化財に登録されているほか、モダニズム建築の保存に関する国際組織 DOCOMOMO の日本支部である DOCOMOMO Japan により優れた日本のモダニズム建築 100 選の 1 つとして選定されております。その歴史的文化的価値が、すでに認められている建物であります。

こうした建物は、機能に応じた整備や構造体の補強によって長寿命化を図り活用していくことが、建築資源の有効活用の視点からも求められております。貴下におかれましては、この貴重な建物の持つ高い文化的意義と歴史的価値について改めてご理解いただき、当該建物の保存活用を図るための方途を積極的にご検討の上、推進されますよう、お願い申し上げる次第です。

なお、本会はこの建物の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

平成 26 年 6 月 2 日

日本真珠会館についての見解

一般社団法人 日本建築学会近畿支部
近代建築部会主査　笠原一人

・建物の概要

兵庫県神戸市中央区東町 122 に位置する日本真珠会館は、1952（昭和 27）年に竣工した、鉄筋コンクリート造地上 4 階、地下 1 階建ての建物である。兵庫県下の真珠取引および真珠業界の復興を目的とし、その拠点や真珠の入札会場となるべく、兵庫県と関西真珠共同組合との共同により建設された。

竣工当時の建物の建築面積は 113.07 坪、延床面積は 539.07 坪であった。竣工当時、1 階にはロビーや管理関係の諸室、2 階に事務室と食堂、3 階に事務室、4 階に真珠交換室と呼ばれる真珠入札や検査に使われる部屋が配置されていた。

設計者は兵庫県営繕課である。当時兵庫県営繕課で設計を担当し後に営繕課長となった光安義光（1919-99 年）が中心となって設計したため、光安義光が設計者として紹介されることもある。

建物のデザインは、装飾をほとんど持たず、機能性を重視しながら鉄筋コンクリート造による柱や壁面など建物の骨格をそのまま見せる、いわゆるモダニズム建築に位置づけられる。建設から 60 年以上が経過しているが、その外観は竣工当時とほとんど変わっていない。屋内でも、光安が設計した家具や照明器具、窓のスチールサッシ、螺旋階段など、細部まで竣工当時の姿をほとんどそのままとどめている。全体的に、竣工当時の姿を非常に良く保持していると言える。

また当該建物は、国の登録有形文化財に登録されているほか、近代建築の保存に関する国際組織 DOCOMOMO の日本支部、DOCOMOMO Japan により優れた日本の近代建築 100 選の 1 つとして選定されている。当該建物が持つ高い歴史的文化財的価値が、すでに社会的に評価を得ていることを示している。

・建築デザイン上の特徴

建物の外観は、全体に箱のような単純かつ明快な姿を見せている。南側と東側壁面には階下の窓に対する深い庇が巡らされて水平線が強調されており、東側では外壁によって垂直性も強調されるなど、水平と垂直による構成を表現したモダニズム建築の典型的な特徴を見せている。また外壁は、2 階以上が白か薄い青緑色のタイルに覆われているが、1 階の壁面だけが黒御影石が貼られて表情を変えるなど、細かな演出も見られる。

建物の内部では、1階中央には応接室があり、設計者の光安義光によってデザインされたモダンな照明器具やテーブル、椅子などが残されている。2階にはかつての食堂があり、その照明器具もモダンで凝ったデザインとなっている。3階には、跳ね上げ式の開閉窓が残されており、建物全体の軽快な印象を強めている。トイレの仕切りガラスも美しい。最上階の 4 階には、真珠交換室と呼ばれる真珠入札や検査に使われる部屋がある。真珠の入札や検査に均等で十分な自然光を必要とするため、北側と南側と東側に大きなガラス面が設置されており、外観上の特徴にもなっている。また 4 階北側のベランダには、屋上に上る螺旋階段が設置されており、そのデザインは繊細で美しい。

このように建物の内外に渡って、モダニズムによる明快な特徴を見せ、また随所にモダンだが凝ったデザインが見られる。変化に富んだ大変優れたデザインによる建物だと言える。

・兵庫県営繕課あるいは光安義光の作品としての価値

当該建物は、兵庫県営繕課の技師であった光安義光を中心とした兵庫県営繕課によって設計された。

戦後になると自治体では、公共建築の設計を民間の建設会社や設計事務所に外注することが増えるが、兵庫県では、戦後長らく営繕課が公共建築の多くを「自前」で設計していた。それは兵庫県営繕課が、優れた設計技術と能力を持つ集団であったことを示しているが、その中心にいたのが光安義光であった。

光安は 1966 年から兵庫県営繕課長を務めた人物で、「兵庫県の建物は兵庫県で設計する」というポリシーを持ち続け、戦後の兵庫県営繕課の設計の中心を担った。1950 年の兵庫県庁入庁後、須磨県税事務所（1951 年）を皮切りに、良質のモダニズム建築を次々と実現させた。その光安が入庁から 2 年後に設計を担当したのが日本真珠会館である。

光安は、その後も水産会館（現存せず／1954 年）や兵庫県立明石高等学校校舎（現存せず／1956・62 年）、兵庫県庁舎（1964・71 年）、兵庫県立近代美術館（現・原田の森ギャラリー／1970 年／村野藤吾と共同設計）などの設計に兵庫県営繕課の技師として関わり、明快かつ繊細な細部を持つ良質なデザインの公共建築を多数残した。

日本真珠会館は、兵庫県営繕課と光安義光が設計を手がけた鉄筋コンクリート造建築の初期の例であり、機能や構造の充実に加えて優れたデザインにより、1950 年代日本のモダニズム建築の到達点を示すものだと言える。

・国際都市神戸の建築遺産としての価値

当該建物は、単体の建物として歴史的文化遺産的価値を持つだけでなく、都市的な視点から見ても、高い歴史的文化的価値を持つものである。

当該建物は、戦後神戸の中心地となった三宮地域にあって神戸市庁舎に近接し、旧居留

地の東端に位置する。我国で最初期に様々なスポーツが行われたことで知られる東遊園地に隣接して建っている。当該建物の東側の敷地には、かつてハンター邸など神戸の異人館の設計で著名なA.N.ハンセルによって設計された神戸倶楽部（1890年）という、居留地の外国人のための交流施設が建っていた。その敷地にはその後ミノル・ヤマサキの設計によるアメリカ領事館（1957年）が建てられた。つまり当該建物の敷地は、神戸港に近い旧居留地の一角にあって、日本におけるスポーツ発祥地や外国人クラブ、領事館などの敷地に隣接するという、神戸の歴史を象徴する場所に建っている。

また神戸は、歴史的に見ても、そして現在でも、真珠産業と深い縁を持つ都市である。真珠養殖の本格化に先立つ大正期に模造真珠製造業が行われ、我国屈指の貿易港であり養殖場の多い西日本産真珠の集散地となっており、真珠選別や加工に適した地理的条件を持ち、海外取引を担う外国人貿易商が多数在住していることなどが、そのような特徴を持つようになった要因として挙げられる。1981年には「パールシティ神戸」を名乗り、真珠関連産業の振興に努めている。当該建物は、その神戸を象徴する産業のための施設として建設された。

このように当該建物は、神戸の歴史を象徴する場所に建ち、その産業を象徴する機能を持つ施設である。神戸という都市の文脈から見ても非常に重要な建物だと言える。

・期待される活用

前述のように、当該建物は建物のデザインに大変優れており、設計者の作品履歴を見ても、そして時代や都市的な視点から見ても、高い歴史的文化的価値を有する貴重なものである。また、戦後間もなく建てられた歴史的文化的価値が高い神戸の建物は、近隣に神戸市庁舎（1957年）などが現存するが、阪神大震災の影響もあって、その多くは現存していない。全国的に見ても非常に少数である。このような優れた歴史的建造物が失われるようなことがあっては、神戸のみならず我国の建築文化にとっても大きな損失である。

当該建物のような鉄骨鉄筋コンクリート造の建物は、修復や改修、補強などを行いながら活用し使い続けるのが、近年の世界的な潮流となっている。世界遺産の登録などを行うユネスコ（UNESCO）の諮問機関であるイコモス（ICOMOS）は、2011年6月に「マドリッド・ドキュメント」を採択したが、その中で、鉄筋コンクリート造の建築を中心とした20世紀の歴史的・文化財的建築について、「リビング・ヘリテージ」という概念を用いて、積極的に活用し使い続けていくことによる建物の保存を提言している。

当該建物は、現在も竣工当時の機能を大きく損なうことなく、また阪神・淡路大震災にも屈することなく現在に至るまで使い続けられ、高い歴史的文化財的価値を維持している。今後も、現在の建物の姿を保存・維持しながら、活用されることが望ましい。よって多角的なご検討と叡慮により、当該建物の保存と活用が計られるよう切望するものである。